



## 日記の下書き

高澤莉乃

雨傘を抱えて空調機械室の扉は雨水色の重力に満たされる。リサイクル方式の定期券は全ての生徒の怠惰と未知への友愛を引き取り、三三〇一教室に紛れ込んだエイリアンと交信している。その間に六月の分解を待つ人工物達は調理され、残されたレモンの香りは遠く、ある箱式石棺まで惨事を伝えたはずである。セハノールSS-1の霧を眠たげに塗り広げたくもりまなこの少女少女は沈黙の横を天使の白い石畳のみを選び取って遠慮深く歩いていく。ただ一つを踏み外した少年、少女は窓を開けるには鋭すぎる爪で浮かぶ手に法則を取り戻し静謐と安全の保持は片足で守護される。彼女が彼女を着がえるとき夕陽よりも高い音で鍵の音は響きわたり、壁の展示は六世紀よりも数刻前の曇天に飾られるだろう。

だいよげん

原 真優

あした、世界が終わるらしい。ネットがそう言って、テレビが乗っかってみんなみんな、あした世界が終わると思ってる。

ざわざわ、バタバタ。心が、小さくなる気がした。だから、海を見に行くことにした。

すう、はあ。ひとりぼっちと、ひとのいない海。  
ph。           ひととうみとは、近い値だ。

すう、はあ。ひとりぼっちと、ひとじゃない海。  
かあ、かあ。カラスはまだ鳴けるみたいだ。

ねえ、知ってる？ あした世界が終わること。

うみいろとは言わない、水色の景色。

水面はキラキラ輝いて、今日も明日も知らん顔。

ねえ、聞いている？ 誰にも会わないのって母が言った。

そらいろとは言える、空色の景色。

太陽はキラキラ輝いて、今日も明日も我が物顔。

熱された砂粒は、珊瑚の夢を見るらしい。

ねえ、聞きたい？ あした世界が終わること。

ひとだけが、それを事前に知りたがる。

すう、はあ。ひとりぼっちと、人じゃない海。

すう、はあ。知りたがらない、うみのおいだ。

此処は私のいたところ

岡田円加

「扉閉まります。お手元をお引きください。扉閉まります。」

「本日は、丸西浄東線をご利用いただきまして誠に、ありがとうございます。  
す。この電車は特急『ふだらく』行きです。『ふだらく』行きです。」

「本日、『きさるき』駅間による交通調整のため四分ほど遅れて発車しております。お急ぎのお客様にご迷惑をお掛けしましたこと、大変申し訳ございません。」

「次は、『かたせ』。次は、『かたせ』。」

「『うら／＼やま』へお越しのお客様はお乗り換えです。(We will soon arrive but anywhere. Please change here for somewhere line.)」

「『かたせ』。『かたせ』。お出口は右側です。(The station is a line. The door on the right side will open.)」

「足元にご注意ください。お出口です。足元にご注意ください。お出口です。」

「底は水深三センチメンタルのさわやかなのどごしとなっております。三つ目でいる咽びばかりの小さなマグロの眼窩は、大変落ち込みやすくなっております。お通りの際はくれぐれもご自愛ください。」

「扉閉まります。飛び込み降車はおやめください。扉閉まります。」

「次は『ごせい』。次は『ごせい』。お出口は左側です。」

「お客様へお知らせします。包装後茫漠した加熱食品は、こちらでお取り扱いできません。ご気分の憂う方は係員にお申し付けください。」

「急停車します。お掴まりください。急停車します。急停車します。」

「お客様にお知らせします。先程、車内に呼吸が検知されました。確認作業を行わせていただきます。お時間お掛けし大変申し訳ございません。」

「確認が終わりました。ただいまより、『現在』『現在』に動きます。お出口は頭上先です。」

Luz del alma

大金杏菜

揺らめく雲に 描く雨は  
アメノホシが 揺らいでる  
欠けた水面<sup>みなも</sup>に陽<sup>ひ</sup>を隠し  
鳥<sup>ちよう</sup>と共に 空を喰む

白い夜に身を包み  
夕暮れと聴く 古竜の囁き  
悠久の石に隠れた痕では  
モノクロームは 檻の外

願いを込めて吹きましよう、  
最果てに行き着く前に。

水銀燈が 乱反射する  
誰も居ない 迷路の中で  
崩れた魔法は 永遠に  
詩人の唄では 戻らない

揺蕩<sup>たゆた</sup>う光を 謳<sup>うた</sup>ってる  
澄んだ花びらの 冒険で  
独りぼっちで咲いた時  
アメノホシが 晴れ渡る

煌夜はもう終わらないから。

夜の帳が降りる前、貴方だけに伝えます。

傳<sup>かしず</sup>く 野薔薇は 架<sup>かし</sup>け橋に

幻想演奏家が躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>って

胸元で 蝶番<sup>ちょうばん</sup>を 抱<sup>かか</sup>きしめる

漂<sup>ただよ</sup>う香りの 理<sup>ことわり</sup>の中

時の愁いを 蒔<sup>ま</sup>いている

水鳥<sup>みづどり</sup>が辿<sup>たど</sup>る 白昼霧<sup>まにま</sup>の間

住処<sup>すま</sup>に帰る 宴<sup>うたげ</sup>の音色は

アメノホシのまなざしに

涙のペンダントを王冠に変えて、  
そう願<sup>ねが</sup>っているから。

蝙蝠傘<sup>こうぼうさん</sup>で アメノホシ

光<sup>ひかり</sup>になって 消<sup>き</sup>えてゆく

風見鶏<sup>ふうみどり</sup>たちは眩<sup>くら</sup>しくて

ゆらゆらモビール 揺<sup>ゆ</sup>らしてる

アメノホシが奏<sup>そう</sup>では

幾<sup>いく</sup>千光年の グロッケンシュピール

翠<sup>すい</sup>の妖精 空<sup>そら</sup>高く

夢見<sup>ゆめみ</sup>の蜥蜴<sup>せき</sup>は 彗<sup>すい</sup>星<sup>せい</sup>へ

ふたつめの月は見えていますか？  
取り残<sup>とりのこ</sup>されないで。

## 崩れた夜

小宮実紗

私を好きだという人は全員どうかしているの。  
彼はとびきりどうかしているの。

触れてみたくなる冷たい頬の骨。

春の夢の中で、そう思う。

昼の熱を知らない朝霞と水の匂い。

儚い現実で、そう思う。

食パンとチーズと牛乳、そしてスーツを着た彼。

特別な、鼓膜にこびりついた生活の、風景。

薬八錠と水と唾液。そして夜が少しだけ早く進む魔法のパジャマ。  
いつもの、愛と呪いと祈りの、風景。

夜が崩れるたび明け方が遠くなっていく。

静かな夜。冷蔵庫のうなる声が聞こえる。

虫一匹すら殺したことがなさそうな無垢な顔をして肉を喰らう彼が、見た  
い。

コンクリートの廊下。赤子のように重たく沈んだ私を彼はただ見下ろしてい  
た。

睫毛に縁取られた瞳は水の膜を張っていて、こちらを真っ直ぐ見る視線は生  
の気配しか感じなかった。死なないことが特技だと信じて疑わなかったの  
に。

彼は肉ではなくて、私の心を喰らうことしか出来なくなっていた。



騒がしい夜。私のうなる声が五月蠅い。

私の隣で少しずつ歩き方が変わっていく彼を、知っている。

白塗りの部屋。彼が激しく咳き込むたび、空間が桜色の泡で充滿していく。

泡はとても小さく、柔らかく、壊れやすく、それなのに何よりもしぶとく私の肺に絡みついた。

壁のひび割れが夜を飲み込んでしまえばいいのに。

月明かりが脈打つ臓器に変わればいいのに。

ベッドの縁にしがみつき、崩れていく彼の呼吸のリズムを数えていた。

影と影が絡み合い、壁を撫でて、徐々に輪郭が薄くなっていく。

私を好きだという人は全員どうかしていたの。

彼はとびきりどうかしていたの。

私だって、どうにかなりたかった。

幕引きに伝う厭悪と愛惜

鈴木優花

ありふれた夏の夜、ポストに返されていた合鍵  
貴方にあげた私の気持ち全てが丸ごと返された  
終焉が季節外れに私の体温を下げた

私のことなんて忘れなよ、だなんて  
心にも無い言葉を贈ったのは

今さら戻れないから

泣かないでよ、後悔なんてしても虚しいだけ

最後に聞いた貴方の声

私は言葉の限り拒絶を並べ、袂を分かった

最後すら愛の扱い方を間違えていた

スマートフォンキーボードにRを打つと

今でも入力候補に表示される、何より愛しかった響き

もう必要のない文字列

でも、どうしてか消したくなかった

気づけば消えていた炎、すでに灰になっていたらしい

私の隣を選んてくれなかった貴方の

ありとあらゆる不幸を望んだ

最期まで消えない呪いを残してあげようと

連絡先を開いては閉じて、言葉を選んでは消して

私以外を生きる貴方の幸せなんて願いたくないのに  
何故か貴方の笑顔を想像してしまったの

自分の感情の居場所と貴方の言葉との狭間で  
いつだって苦しんでいた私  
だけど心はいつでもあなたの元にいた

共に過ごした一年で私の黒髪は随分伸びた  
貴方だけが知っていた夜の濡れた長い髪  
もう、ほかの人に何度も触れさせてしまった  
貴方が独占していた私のすべて

儚く輪郭を失ってゆく

季節の一巡に結びつく私と貴方の足跡

また、四季の巡りにかけて遠く彼方へ去ってゆく



月

坂井祐太

高速道路の上を走る車の中

車窓から空を見上げると

ぼっかり 月が浮かんでいた

ただの月――

でもそれをぼんやり眺めていると

ふと思い出した

父さんが昔 教えてくれた

「月はチーズでできているんだぞ」

そうだチーズを食べに月へ行こう

車はどんどんスピードを上げていく

前へ 前へ 突き進む

そして ふわりと宙に浮かんだ

車は離陸した

車はロケットとなりぐんぐん上昇する

月にはどんなチーズがあるのだろう

モッツアレラ、エメンタールにマスカルポーネ

カマンベールにゴルゴンゾーラ、ブルーチーズとリコッタだ

どんなチーズも楽しみさ

ロケットは月に突き刺さり着陸した

僕は月へ降り立ち

さっそく月を食べた

月はグリーンチーズの味がした

やわらかくて 少しすっぱい

それでいて やさしい味

僕は一生懸命 月を削って

クラッカーにのせ

ピザにのせ

グラタンにかけて

ひたすら食べた

月の穴から

ネズミたちがぞろぞろと出てきた

たくさんネズミが

チーズを運んで お祭り騒ぎ

それをぼくはチーズを食べながら見ていると

ネズミたちに見つかった

ネズミはぼくを取り囲み激しく怒った

チーズを取られると思ったらしい

いっぱいあるからいいじゃないかと思いつつも

ぼくは慌ててロケットに乗り込んだ

ネズミはロケットにかじりつく

ロケットは地球に向かって飛び出した

ふっと スピードが落ちた

窓の外には

高速道路の街灯が流れていた

運転席の父さんが

「ほら、もうすぐ着くぞ」と笑った

車にはチーズのにおいが漂い

口の中に残るチーズの味を

忘れられずにいた

## サンデードライバー

小西倫加

銀河の中心を見に南半球へ行く

わたしは僻地へ向かうサンデードライバー

アクセルを踏み込むと枠組みが前進するのは裏腹に

中身は数ミリ置いて行かれてしまった

いくら瞬きを繰り返しても

オンボロ車はスーパーカーにはならないし

アスファルトは草原にはならない

痺れを切らして降りてみるとなんと

脳みそが空に引っ張られて

私の体から離脱していつてしまった

近日の暑さでそれは茹で上がっていたし

からっぽの頭で別に必要ないかもしれないと思ったことを

わたしは情けないと思った

中に戻ると冷房をかけすぎていることに気づいた

目を閉じ深呼吸をして

後戻りできない車のアクセルを再び踏んだ

車にはナビがついていないが

好きな音楽が鳴っている、そんな諦念を

わたしは情けないと思った

ヨーコ

黒田亮平

朝五時、玄関のドアが軋む音をわたしは目を覚まして聞いている。リビングのテーブルには昨日の夜の残り物がラップをかけておかれている。朝七時、母のオレンジ色のビブスは汗でぐっしり濡れている。手に握られたビラの束には排外主義と国粹主義の俗悪な文字が踊っている。見知らぬ通行人にペコペコ頭をさげては無視されつづける母のまえを、わたしは見知らぬ通行人として通り過ぎる。そのとき、母とわたしは赤の他人同士になる。

ヨーコ

おまえは太陽みたたく明るい子に育つようにヨーコと名付けられたのだ

おまえは陽子であり妖子である

午睡する私を見下ろすおまえの口元には不敵な微笑

私のなかにあやしいものをよびさますおまえ

ヨーコ おまえは溶固であり容子である

おまえは流れつつ固まる凝固質の流体

おまえはひとつの風景である

ヨーコ おまえは幼子であり養子である

ただいちどしか語られることのない寓話であるおまえ

横であり縦であり無限の拡がりをもつカルテジアン座標であるおまえ

座標軸のなかに斜線をひくとその裂け目から生まれた

それが私である



## 日常

屋良はな

たくさんの人が知っていること

青い海があって、白い砂浜があって、

独特の伝統と歴史があって、アメリカみたいな雰囲気もある

あの小さい島のきれいなところ

黒いところは生活の隙間に隠された

しょうがない

戦闘機が落ちて、多くの子どもが死んだけど、

小さい女の子は3人の軍人さんにおそわれたけど、

彼女たちは抵抗できないまま殺されたけど、

しょうがない

戦闘機の大きな音は気にもとめないぐらい日常になったし、

わたしの叔父は基地の中のコックさんだ

コザの夜は休みの軍人さんでにぎわい、当然みたいにホテルに誘われる

知られないままのわるいことと強調されるいいところ

わたしは知っているけど見ないふりが上手なので

だって、しょうがない

きつと何も変わらないし、もうずっとこれがわたしの日常だから

## 修羅部

中井川侑平

向こうの方がきつと あなたのたけになるわ

従順な少年は

生命線のような坂道を

一本 二本 三本超えて

ようやくたどり着いたのは 修羅の門

鴨はまだ来ない

今のうち 帰れるのは 今のうち

帰れ

その刹那 少年の脳は 麻酔にかけられて

気づけば足を踏み入れている 修羅

藍色の袈裟にくるまれた 自信のなさそうな少年は

もう 気が抜けてしまった

向こうにいる少女たちは 少年を鼓舞して

まだ 人間らしさに溢れている

鴨が来た

鴨がどうした

鴨には一筋の道理もない

鴨は幼い娘がいるのに煙草を吸う

鴨は煙草が足りなくなるとすぐに修羅からいなくなる

鴨にとって弱いものをいじめることは煙草を吸うことと同じ

鴨には罪の意識がない

鴨を特別にさせるものは 本当は何もない

修羅に響く 鴨の唸り

修羅に響く 少年少女の叫び

修羅に響く 竹の弾み

修羅に響く 少年の名前

ただ絶叫する少年

鴨は決して満足しない

少年は真つすぐに その目を見る

しなる腕 地鳴る足 少年の阿鼻叫喚

鴨によって完全に覆いつくされた修羅

少年と少女を失った人間たち

しなる腕 地鳴る足 人間たちの阿鼻叫喚

心を一つに修羅を作る

心を一つに修羅になる

## 共生的アローン（経路からの知らせ）

清水葵衣

23区内で目的地の最寄りに降りるのは腑に落ちないから飯田橋から川を伝った。

無線イヤホンから流した渋谷系のおかげで私の白い日傘はご機嫌！

ビル風にあおられながら上下に揺れている。

紺の墨がほとはしる

その墨は星の子で、ときに人をぎゅつと苦しめる

人工的な緑地や、ふと迷い込む静かな住宅地に、どこか好きで騙されているふしがある。だって本物なんて知らないもの。ベッドタウン出身の何が悪い？ 地方っておかしな言葉じゃない？

君はそうして生み出されて、やはり真っすぐ見つめる

嫌になりはしない

きつとしばらくはこの宇宙の中

広い道路の反対側で、姿勢よく並走するもう一人がいた。

左右盲だから、どちらが逆走なのかを知らない。縦列駐車だってうまくできない。

次見たときにはいなくなっていたもう一人のことを思いながら、知りもしないし馴染みもない道をゆくのです。

それでどうしてか私は、いつだって元気になるのです。

君は孤独を大切に抱えていて

それはおそらく生命線だから  
手放さなくていいのだ

建物ばかりの場所ではおどる日傘の出番はなくて、汗のにじむ手のひらにたまれて収まるばかりになってしまった。私も影にすっぽり収まった。ひんやりとしたセイロンティーを身体はぐんぐん吸収する。おいしいお茶の魔法に何度も何度も助けられている。

融合と分離を繰り返して、暗闇が見つけられたり、作られたりする  
そうしてあるとき小さな破裂音がして  
よりよくなってゆく不思議

良いものをたくさん見た。それはとても大きくて赤い絵。楓が描かれた屏風。きめの細かいレース。派手な女に何かを解説する純朴な男。演歌歌手のグッズ列。作品がぶら下がるアトリエ。小さな段差につまずく自分。明日のために、足を上げて眠った。優しい人が夢に出た。いい目覚めだった。

目まぐるしく変化する関係のなかで、人々は、  
そっと他人のためにはたらき、再び孤独に寄りかかる  
上手に他人を愛して、やがて寂しさを求める

ごく正しいサイクルは人々を悩ませて  
その中心は人々を笑う  
その折々で人々も笑う  
ごく正しいサイクルが人々を、  
潤して、ずっと新しくするとき  
他人と純に相対させるときに

なんにもならない

簾内離回

あのひとはしぜんのおんがくを愛した

かぜのね むしのこえ とりのうた

いつからか ひとのおんがくばかりきいていた

はげしいおとにふさがれて せみのさけびもとどかない

あのひとはおかあさんのべんとうを愛した

おきにいりは とくだいサイズのてりやきチキンサンド

それをつくれるひとはもういないけれど

わたしのべんとうも いつもおいしいと いつてくれた

あのひとはふたりのじかんを愛した

そのしあわせには いくらことばをつらねてもたりない

いつしか おはよう さえかわさなくなった

けれど わたしにそれをうらむことは できない

そしてあのひとはたびにでた

どこへいったというのか 愛したものをおきざりにして  
すてられるわけがないでしょう

わたしがもっていたって なんにもならないけれど

## 初恋

鏡朱

数多の星々の廻天も終わり

空には落ちる流星のみとなったころ

大気には兄弟の血と

逆行する憐憫のみ彷徨う

降り積もる青銅の鐘の音に

私は辟易していた

太陽の吠える声のみが木霊する

【虚妄】は盲目の男どもに片方の乳房を抉られた

彼女の騙りに火を背負った巨人が死んだからだ

男どもの髪は先のちじれたところから燃え

やがては塵となった

西方からなだれこむ熱を帯びた風に吞まれ

その耳障りな音が息をひそめたとき

彼女は【真実】を殺して皮を剥いだ

逃れたかったのでも

疑われたかったのでも

殺されたかったのでもない

ただ愛してほしかったのだ

【虚妄】が【真実】を騙り近づく

哲学者は言葉なく

撫でる柔らかな春風よりもそつと

ただ彼女を抱きしめ

幾度の逢瀬を経たあとかのような  
深く熱い

息はうだり流れを淀ませ  
舌は蛇となり貪るような  
そんな口づけを突き付けた  
きつとこのときだろう

太陽が一瞥をくれたのは  
月は彼の虹彩だと忘れてはならない

五番目に燃やされたのは【女】だった  
彼女はときに

女神であり  
偶像であり

famme fatale であった

彼女の瞳は質の悪い鏡  
見たものは際限なく驕った  
四肢はやけに透き通り  
ひとたび触れたのなら

言の葉を失ってしまう

呪われた義眼に魂を喰われ  
辜丸に脳を敷き詰めた愚かな獣どもの手綱を取り

星を思うままに振り回した  
あるときは太陽に股を開き

【死】と【欲望】と【虚妄】と【盗賊】を産んだこともあった  
ああなんたる不遜か

私は決して彼女を許すことなどできない

太陽はまず彼女を炉に放り込んだ  
ガラス質の肌が少し溶け



黄金の輪郭が歪み始めたころ

炉は鏡となり

その醜態を彼女に吐露した

太陽は彼女の滑らかな嬌声に身を震わせ

彼女の子宮を卵巣から半世紀ほどかけて燃やす

一際艶やかなアルトサクソフォンの響きに

【死】と【男】はさびた鉛の突起を震わせ

その灰を求めて太陽に懇願する

【男】は仰々しい態度で礼賛の歌を垂れ流し

太陽をたばかった

灰はただ厳かに剣を磨くためにある

七十二番目に燃やされたのは【知識】だった

彼は病を癒した

ただ癒した

医学で癒した

数学で癒した

万有引力で癒した

核分裂で癒した

病が癒える度に人は自らの無知を知った

知ることは酒だった

しかし不幸の汽笛が耳から離れなくなったのだ

無知なる幸福は腐敗の匂いを漂わせ

人々の器は光よりも速く浸食した

私は彼を愛していた

人間は不幸でなくてはならない

太陽は彼の四肢を引きちぎり薪にくべた  
そして問うた

なぜこれは燃えているのかと  
なぜ燃えなければならなかったのかと

【知識】は科学する

そのたくましい脳で学問する

回路に艶やかな鮮血が注がれ

寄せては返す波のように

勢力を増し真理を希求する

歴史上類を見ない偉業に城壁は悲鳴を上げた

過剰な熱で溶けて爛れた

彼のことだ

垂らした血も運河となり

また星雲の淀みを反響させるのだろう

三千七百八十二番目に燃やされたのは【男】だった  
彼は騒ぐのが好きだった

【弱さ】を舐って遊んだ

指を輪切りにして

そのたびに塩に浸した鑊で肉を削った

悲鳴が彼の嗜好品だった

ゴールドのネックレスを三重に

シルバーのネックレスをさらに四重にしていたので

頸椎が変形してテトラポットのようなだ

嘲笑が洪水をおこし

天井を翻して大雨を降らせたこともあった

子供の涙を水銀に変えて殺した

溺れた老輩の足に楔を突き立てて殺した

女は髪を脛に詰め込んで背骨をひん曲げて殺した

先に皮がはがれて死ぬのもいた

私は彼を嘲った

これほど哀れな人形劇

他では見られまい

太陽は彼の身にまとう装飾を引きはがした  
なんたることか

肥え太った蛆虫が筋肉となり這う  
いつからか彼は空洞だった

ペニス<sup>ペニス</sup>は薄汚れた外套がその身を離さず

ナナフシの群体とさほど違いはない

彼は鏡をもっていなかった

湯を沸かす薪も持っていなかった

私は初めて太陽にお声がけした

灰も残してはなりませぬ

太陽はコロナを滾らせて応えて下さる

プロミネンスとフレアで交互に燃やした

灰の溶けたその空気さえ闇に消えた

明日燃えるのは私だろう

ただ銀の風が郷愁を誘う

いのちの好き嫌い

田原悠輝

アリが歩いていた

手で押してみた

身体をよじりじたばたしている

手には虫眼鏡

聖なる光が一点にあつまる

黒を焼き尽くす

白い煙と焦げたにおい

玄関にゼリーを食べている黒い虫がいた

凜々しい角が2本生えている

手には霧吹き

土が水をふくむ

ああ

長生きしてくれよ

## 七夕の夜

青木陽菜

星の数だけ願いがあるなら

願いの数だけ星がある

この世界はいつも誰かの思い通り

雨が降らなきゃ緑は枯れる

笑う子どもの叫び声

輝くあいつらの汚い汗

緑に謝れ奪うしか脳のない人工物め

ああ、

何がいけないんだとがなる声が聞こえた

拍手もブーイングも遠くから見れば同じだと知った

スピードを上げるあの列車にブレーキはない

止めようとして殴ってとつくに折れた後

そうか、

こんなにたくさんメニュー

神様は頼み過ぎたな

味が喧嘩してもはやおいしくない

なんで同じタイミングで口に運びましたか？

フォークもナイフもスプーンも箸も手に負えない

なるほど。

今夜は星が多すぎるようです

こんなに眩しくちゃ

カササギも目がくらんで飛べやしないよ

## 恋人の子宮

紀卿

温かな子宮、生臭い羊水。

揺られ、眠り、

僕は君の子になった。

そしてへその緒を通じて、

宿り虫のように

君の養分をむさぼる。

ああ、それが、僕――

醜く、哀れな僕。

僕は君のすべてを知っていた。

ぬめる内膜の感触、

腸がうねる音、心臓の鼓動、

もやに包まれた子宮の闇。

でも、本当は何も知らなかった。

君の顔も、膣も、腹も、

脚も、髪も、乳房も。

僕は何ひとつ知らなかった。

こんな僕は、やっぱり君の子にはなれないよね。

だから、殺してくれ。

潰して、絞って、引きさいて、

僕をぐちゃぐちゃにして、

骨まで、肉まで、魂まで。

へその緒なんていら  
ない。  
ぬくもりなんて偽りだ。  
愛なんて嘘っぱちだ。

僕を潰して、  
ぐちゃぐちゃに潰して、  
もう一度子宮に戻して、  
血と羊水と一緒に、流してくれ。

もう何もいらない。  
顔も声も、誰の子でもなくていい。  
ただの塊でいい。

君の中の  
黒くてぬるい穴に  
沈めてくれ。

全部、終わらせて。  
君の子宮ごと、僕を終わらせて。

## 車窓

佐谷戸明穂

「プールに行こう」

父はそう言って、車を家の前に停めて私たちを呼んだ  
ショッピングセンターの服屋に水着が並ぶ頃

我が家では「泳ぎたい」が口癖になっていた

8月には花火が上がる川沿いを下る

川は瞬きを繰り返し、やわらかな風は頬と手を撫でた  
白く、くつきりとした雲が浮かんでいた

車内では、父と私だけが起きていた

景色を目に焼き付けようとしていた 父の頭に雲が見えた

来年には自由にプールに行けないと知っていた

恋心を教えてくれた大学生を思い浮かべながら、隣で眠る弟の横顔を眺めて  
いた

「楽しい？」と問いかける父に、笑顔で頷いた

私はまだ少女

頭上にはやわらかな雲が広がっていた



## 幻の音

大崎千夏

重い物音には心臓が跳ねる

あの時のことが繰り返されると思っ  
て床に踵を蹴り下ろしたような音がして  
祖父は浴室で倒れたのだ

気を失うでもなく血が出るわけでもなく  
脳が損傷を負った人間のうめき声が響いた

私たちが素直に知覚することはできなくなった

ボタン、と冷蔵庫が閉められる  
ガシャン、と便座が下ろされる  
ドスン、と祖父がソファに座る  
祖父の姿を確認して胸を撫でおろす

生きていてほしいからなんだ  
聞こえなければ  
見ていなければ

冷たくなった祖父が転がっているかもしれない

体はもはや意思と切り離されているのに  
些細なことで生死が決まるのに  
無数の罨であふれているのに  
祖父の世界は今この瞬間と遠い過去の記憶だけだ

物音もなにも聞きたくない  
疲れてしまった

苦しむ祖父も見たくない  
元気になってくれないかな  
願ってしまった

見えないところで  
聞こえないところで

で、くれないかな

## あの子

田口果穂

久しぶりにあの子に会った

前はどこか暗い目をして

ぜんぶぜんぶなげやりで

とりあえず怒られないようほどほどにやってたあの子が

目には光があって

やりたいとおもっててることをしゃべって

そのためだけに勉強もすごくしだして

まるで別人みたいになってた

ものすごく ものすごく びっくりした

あんなにキラキラした目で

あんなに楽しそうにしているあの子をみたのは

いったいいつぶりだろう

そういえば背も高くなってる

前会ったときはおんなじくらいだった気がする

今のあの子は私が知ってるあの子より背が高い

並んでみたら思ったより差があった

うれしいような 悔しいような なんとなく複雑な気持ちになった

なんとなくのあの子を見てみたら

あの子の顔は どこか見覚えのある得意げな顔をしてた

その顔をみたら なんだか複雑な気持ちのスーと消えて

私は思わずしゃがんで 下からまだ得意げにしているあの子の顔をみて

「うわぁ 背がたかあい」って言っていた そうすると  
やっぱりどこか見覚えのあるあの子の得意げな顔がもっと得意げになった  
それをみて思わず笑うと

あの子はやっぱり私の知ってるふしぎそうな顔をした

## オリジナルチキン

福田椿

私、チキンを焼ける身分になって、  
私、一生あなたに心を開かない。  
私が作った加工食品だけで生きて

勝負にめっぽう弱い

「ダイスカット」くん。ミックスベジタブル

野菜は絶対、洗剤で洗う。

すくなくとも、

川の生き物にとって、加害である。

それでも死なないで。

決して知らないで。

それでも知ってほしかった

私のほんとうのことを

私、私の顔が一番好きだけど、

あなたは、一生

私のことを可愛いとは

思わない健康

思えないのね。

健康体なのでしょう。

風味づけのためなんかじゃない！

オリジナル  
主人格としての鶏肉は

知らず知らずのうちに、

あなたになる。

あなたを○す。

○して、カラダが置き換わる

おはよう、

滋養、

栄養、

効能、

そんなのフレーバーテキストだよ！  
って

知らないで

死なないで。

もう、ぜんぶ

ぜんぶ一生知らないままで

全て私の作ったマニュアルチャーで  
体を満たして？

それっぽい形式のある××を

あなたに与え続けるから。

それでカラダを作ってね。

体の違法建築によって、

神奈川県警に連行されても、  
諦めないで。

そのカラダで生きていて。

いやもう、ちよつと無理だとは思うけど、  
いつか私にちようだいね。

あなた、

社会的に、生産性のある身分になったというが、

消費するだけの少女に成り下がった殿方の

カラダ  
体

は、むしろモノのよう。

嘘でもいい

遺棄をしよう。

海の生き物にとって、加害である。

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

つまらないしりとりは

やめてください。

ねえもう、やめたほうが

よかつたのかも。

知らない体を好きになる。ことを

許してね。

だって、あなた

明日には知らない人。

かつて人間だった蛙だって、鶏肉と同じなんでしょ  
 きっと、誰も気づかない。

春、

あなたの善行に対する罪を厳罰化する

見せない、一生

私のほんとうのことは、知ってしまったて欲しいような  
でも、死なないでほしい。

ようやく見つけた

健康な体

生きててね。

※「る」の羅列は草野心平『春殖』から